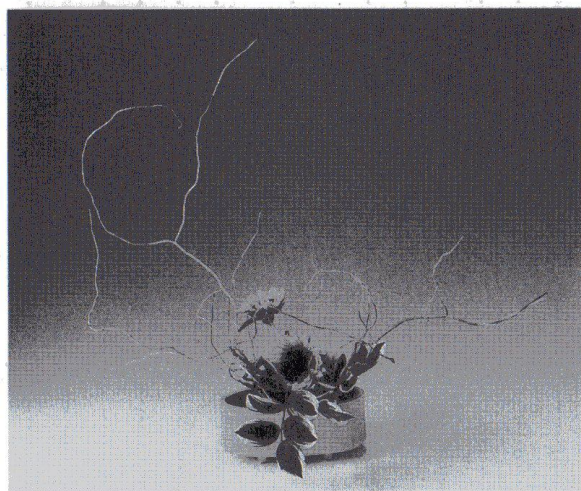


佐東の文化

No.31



生花 杉本幸甫

平成17年10月15日

佐東の文化

No.
31



佐東文化協会

目次

巻頭言

作東文化協会の発足にあたって

横山 猛 1

特別寄稿

雲魚の一日 阿部 雲魚 3

千人針と私 岡田 千茶 4

所感寸言

戦後六十年に思う 山本 章 7

信頼 井上 健一 8

随筆随想

神田の米作り 井口 祥子 11

かわいらしい野鳥、じょうびたき 中田 澄子 12

介護と私 青山 元江 14

梵字と共に 山本 勢津子 15

やまぼうし(四照花) 加藤 美雪 15

歴史紀行

偶感 オウカミ伝兵衛 江見 英雄 19

老いのたわ言 吉政 実夫 20

ふるさと発見

宮原獅子舞との出会い 上原 和子 23

裾野がひろがる春日歌舞伎 有友 一正 25

短文芸

鬼ノ城讃歌

俳句 田中 清一 28

阿波路にて 春名 波留夫 29

雨請い 江見 英雄 29

火取虫 坂井 はつ子 30

粘着ねずみ 黒藪 貴 30

蘇る 宿野 淑子 30

若葉風 井口 祥子 30

故郷 山下 照夫 31

トラちゃん田ンぼ 春名 静山 31

春 高元 寛一 31

折り折りに 杉本 幸子 31

田植 高橋 やえ子 32

待ち侘びる 加藤 美雪 32

星月夜 森本 久子 32

葱坊主 青山 元江 32

道 坂部 金治 33

芽木の山 山本 登山 33

川柳 34

灯 春名 静山 34

大相撲 黒藪 貴 34

題字

山本章

寿	山本千恵	34
時事見聞	山下照夫	34
戦	高元寛一	35
長生き	江見英雄	35
若い気	山本登山	35
独り	山本昌子	35
平和	名部みどり	36
老いて尚	山下光子	36
足	名部和子	36
余生	香山夕咲	36
古時計	太田智子	37
大物	衣笠隼巳	37
生きる	原洋一	37
短歌		
母は在さぬ	三木泰葉	38
鹿久居島	江見英雄	39
古代の品種	春名静山	39
わが浮目	坂井はつ子	40
和氣藹々	黒薺貴	40
折りにふれ	杉本幸子	41
津山城にて	加藤芳英	41
難問山積	山下照夫	42
峡の邑	江見眞智子	42

時うつろい	山下光子	43
雪達磨	山下三代子	43
歌舞伎	高元寛一	44
がんばりなさんな	加百由起子	44
無駄な抵抗	小林増代	45
渡田に生きて	有元理嘉子	45
台風災害	宿野和穂	46
生きて在れば	新田千晶	46
峡に生きて	新免三代	47
孫	原田順子	47
揺らぐ灯火	横山美恵子	48
懐古	横山すみ子	49
生かされ生きて	横山昌子	49
狂ふ	井上智	50
船の旅	名部みどり	50
里の夕暮	安西苑	51
天変地異	名部方子	51
心に楔	藤本伸子	52
孫	名部和子	52
年輪	藤川亜也	53
紫陽花	横林富砂子	53
わが身のめぐり	清田三智子	54
折折に	原幸子	54

四季折々に	鳥形節子	55
幼孫	池田保子	55
寒くても	荒尾登志ゑ	56
母おもふ日々	津田次恵	56
新しき命	内藤慶子	57
母を偲びて	光井房子	57
能登香の里	森本久子	58
春から夏へ	福島美智子	58
孫	船曳彩	59
成長	新井和代	60
山里の春	角南三津ゑ	60
つれづれに	角利津	61
時間	日下智加枝	61
夕日の記憶	入矢敏江	62
春	浜田くに子	62
折にふれ	北村和子	63
追憶	新免初子	63
折々に	加藤保子	64
思ひ出の防空壕	長澤和枝	64
朝の光	中川富美枝	65
峡のめぐり	黒石貞子	65
夏の匂ひ	末宗千歳	66
潤ふものは	黒石登代	66

生きちよるだけでまる儲け	阿部すみゑ	67
醍醐の桜	森本かよ子	67
田畑の虫	梅本信恵	68
危ふき信頼	徳野富美子	68
台風百態	谷名保美	69
灰の水曜日	関内惇	69
作東文化協会会則		70
平成16年度 作東町文化協会事業報告		72
平成16年度 作東町文化協会決算報告		73
平成17年度 作東文化協会会員・役員名簿		74
編集後記		85

〈資料〉 作東歴史年表

表紙説明

題「晩秋の川面」写真

梓川の川藻に秋の名残りが留まっていた

小玉 司

〔巻頭言〕 作東文化協会の発足にあたって

会長 横山 猛

平成十七年七月十二日、設立総会が開かれ、美作市文化連盟が発足しました。それに伴って、昭和四十二年七月から三十八年間続いてきた作東町文化協会は「美作市文化連盟作東文化協会」として、再スタートを切ることとなりました。

さて、「文化」という言葉を辞書で引いてみますと、いろいろ書いてある中に、「世の中が開け、進歩し、人々の生活の水準が高くなること。人間が自然に対して働きかける過程で作り出した物質的・精神的所産の総称。物質的所産を文明というのに対し、精神的所産（学問・芸術・道徳・宗教など）を文化という場合が多い。」という定義があります。このように言くと、「文化」というものが大変難しく感じられますが、私はそんなに難しいものでもないと思っています。

例えば、こんなことがありました——ある夏の日の夕暮、遠くの方で雷が鳴っていて、ふと足元を見ると、十葉の花が白く咲いていました。夕闇の迫ってくる中で、十字の白い花が印象的でした。夕闇の

底にしゃがんでじっと見ているうちに、*“遠雷や揺るるともなき十葉の花しろじろと夕闇の底”*という一首が浮んできました。呟いていると、自分も十葉の花の一つとなって夕闇の底を飾っているような気分になってしまいました——。

私の場合は、その時の情景や心情を短歌形式によって表現したわけですが、これが、写真であろうと絵であろうと書であろうと芸能であろうと、自分の好きな方法によって表現してみることが文化であり、表現することによって更に心が豊かになっていくことが文化であると思っています。いやいや、何かに引かれた心の動きが文化の始まりであり、それを行動に移すことが文化活動なのでしょう。このように考えると、日常生活のほんの身近なところで文化活動がどんどんできることになりました。

私たちの文化協会は、このような文化活動のお手伝いができることを願っています。幸い、作東文化協会には、六つの支部と十二もの部があり、それぞれに特長のある文化活動を行っています。会の名称は変わりましても、できるかぎり、研修や発表の機会と場をつくり出し、今まで以上に充実したものに、地域の皆さんの心が少しでも豊かになるよう努力していきたいと思っています。

御理解と御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

特別寄稿

雲魚の一日

阿部 雲魚
(岡山市 書家)

文化協会から原稿依頼を受けて、筆を進めてみる。

私の一日は、起床午前四時、朝食の用意をする。パン食、野菜サラダ、梅干一個。糖尿病に罹^{かか}ってから、十数年になる。昼、食事は麵^{めん}類、夕方は米飯^{はん}食、一日に米飯百二十グラムにて魚と野菜の混合食の日々変更なく、体を養^{たも}う為に少食知足の生活である。美食は避けて、酒、煙草や、甘いものを摂^{せつ}取しない。体を養^たうに足る食事療法である。間食は牛乳コップ半分と、果物少々、水分は沢山取り、常時呑む茶の量は多い。

次に朝五時より小作品を揮毫する。漢字、仮名、双方書く。用紙は雅仙紙の二分の一のもの、特別の自詠歌は加工の諸用箋を用う。多い日は五十枚を越すが定量はな

い。稽古は自由で、漢字、仮名、抽象と、書道としては全部書くので非常に広範囲であり、その上に抽象画を描写するので時間を惜しんでの研学である。

外出は散歩に町内を十五分ずつ、午前、午後、時を選び、杖を頼りに歩く。その間に、読書は毎日、相当時間を用い、現在は歌集を読む日が多い。歌作りも拙いながら少々、手帖に日々、書き列^なねている。

とにかく、書と歌と画の三拍子に寸暇を用いている。「篤信好学」「継続実行」「和顔愛語」が目標で毎日の行藏である。

九十三歳の現役選手である。

千人針と私

岡田 千茶
(朝日新聞岡山柳檀選者)

戦前、出征する兵士の必携したものに千人針があった。女性が一人一針ずつ赤い木綿糸で、腹巻状の布に結び瘤を作り、千人針で完成させる。それを身に付けていると敵の弾丸に当たらない、と信じられていた。

千人針は普通母親が息子の為に用意したもののである。徴兵検査が終わって軍隊へ入隊する。或いは招集されて戦地へ送られることが予想されるようになると、予め街頭に立ったり、女学校などに依頼してしつらえた。

子供の頃、母を亡くした私に、千人針まで考える者はいなかったが、昭和十九年五月、徴兵検査が終わって間もなく、私に千人針が届いた。当時大阪に住んでいた幼馴染みのM子からだった。いつの間に整えていたのだらう、と啞然とし、正直有難いと思った。

M子は私と同じ十九歳、その時分の女性としたら、多少なりとも好意を持つ男に対する一般的な行為だったの

だろう。私はこの千人針を腹に巻いて入隊した。

M子の家は畳屋で、私の父と同年の小父さんは、広い土間に据えた仕事台で畳を拵^とえていた。白眼でぎょろりと睨む、私には怖い小父さんだったが、大阪へ出稼ぎに行くことが多く、残された女ばかり四人の家へよく遊びに行った。M子はおとなしい遊び上手な少女だった。

M子の母親はM子と私を結びつけて考えることが多く、「小学校へあがったらM子と並んで勉強すりゃあええ」と常々言っていたから、一年生になって彼女と並ぶものと思っていた私は、男女別の学級編成で男の子と同じ机に並ぶことになった時、「M子と並ぶんじゃあ」と泣き叫んで泣きやまないので、担任の白井先生が隣の教室のM子を連れてきて一寸並んで座らせた。M子は全く無表情というか知らぬ顔で、何を思っていたか分からない。

小学校を卒業する年、M子の一家は大阪へ移り住んだ。

彼女は幼い頃から積極的に意思表示をする少女ではなかったが、大阪へ行ってから、幼い恋文めいた手紙をくれるようになった。それに対して私は積極的ではなく、幼馴染みの域を出ない覚めた返事を書いていたと思う。

昭和二十一年三月、私は台湾から復員した。M子の一家は空襲が激しくなった時点で、郷里である元の場所に疎開していた。それを知った私は、ある日の夕方、彼女の家を訪ねた。父親は居らず、一家は夕食の準備をしている様子だったが、彼女の姉と母親が出迎えてくれた。座敷へ通されて手持ち無沙汰に座っていると、「M子、芳美（私の本名）さんじゃがな、はよう行っておもてなしをせにゃあ」と母親の声がして、間もなくM子がお茶を盆にのせてやってきた。二十一歳になっている彼女は、相変わらず控えめで、もんぺの膝をきちんと揃えて座り、「ほんとによくまあご無事で」と言ってお目を見せた。どういう訳か私は、若い女性と相対している華やいだ気分にはなれず、M子は幼馴染みのM子のままであった。

翌年私は警察練習所へ入り、その年彼女は近隣の町へ嫁いだと聞いた。一度、作東の実家の近くで偶然子供を背負ったM子とすれ違ったが、彼女は眼を逸らしたまま一言も言わず通り過ぎた。彼女を見たのはそれが最後で、

その数年後、若くしてこの世を去った。
今年戦後六十年、今更のように彼女を想う私である。

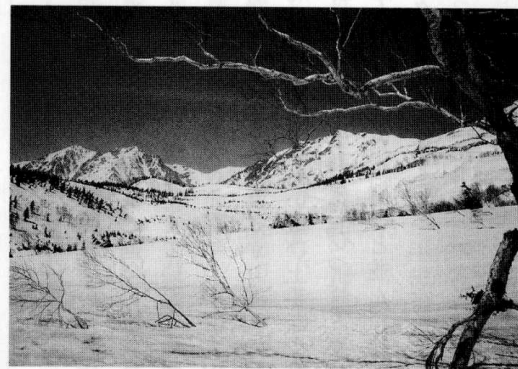


写真 末元正和

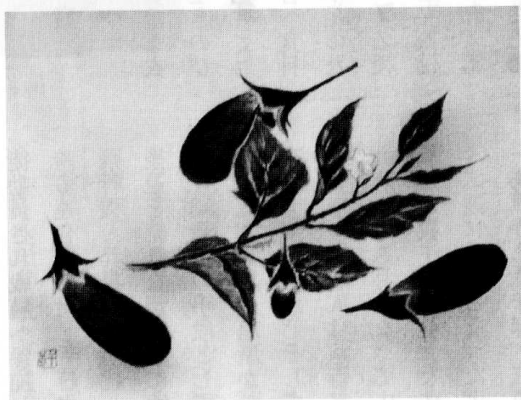
感想寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



日本画 円東千歳

戦後六十年に思う

山本章

昭和十二年に勃発した日中戦争は年と共に拡大し、泥沼に足を突っ込んだ状態となり、四年後の昭和十六年には遂に米英を相手に太平洋戦争に突入した。真珠湾をはじめ開戦当初の大戦果によって、強大な米英他連合国に勝てるという幻想をもって一億総動員、若者は殆んど戦地へ、或いは軍需工場へ動員された。しかし昭和十八年頃より戦況は次第に悪化し、国民生活は極度の物資不足に悩まされた。主食の米は配給制となり、他の食料品や衣料も切符制で自由を買えず、年と共に厳しさを増した。「ほしがりません勝つまでは」

の標語や、都市に住む人が貴重な衣類を一枚ずつ食料に替えて生きのびる「筍生活」という言葉が流行した。また毎日のように町から田舎へ食料買出しの列が続いた。資源不足のため節約が叫ばれ、兵器をつくるためにお寺の鐘まで供出した。「石油の一滴は血の一滴」ともいわれ、再三に亘る敵機の空襲から逃れるため都市の児童は田舎へ集団疎開をした。

戦況も連合軍の反撃によっていよいよ悪化し、アッツ島をはじめサイパン、グアムその他多くの守備隊が玉碎（全員戦死）した。勉強中の大

学、高等専門学校の同僚も途中で学徒動員され戦場へ参加した。物量を誇る連合軍に対し、日本軍は艦船・飛行機・兵員等を消耗し、南洋から後退を続けたが、遂に沖縄も戦場となり、最後の手段として陸軍は九州の知覧、海軍は鹿屋から特攻隊が飛びたっていた。そしてその尊い犠牲となった若人は八百二十六名といわれる。八月になって広島と長崎に原爆が投下され莫大な住民が亡くなって遂に敗戦となった。

あれから六十年、二百三十数万の戦死者、空襲に依る死者八十万ともいわれる尊い命が失われ、全国都市の大半は廃墟と化した。当時国民はひとしく戦争はいやだ、二度とあつてはならぬと心に誓った。また私達の親族、友人の多くが還らぬ人とな

り、特に遺族の方々の悲しみは何年たってもうすれることはない。

廃墟の中から奇跡的に復興し、現在の繁栄を遂げた日本も、戦争を体験しない世代が多くなり、昔のこととして次第に風化して行くのは止むを得ないが、六十年も平和が続くと、戦争がどれだけ悲惨で平和がどれだけ有難いかという関心がうすれてしまう。

核がある以上簡単には戦争は起きないだろうというのは希望的観測であらう。現に北朝鮮は核をもち、テ

信頼

先日盲導犬と歩いている人を見かけた。

井上健一

道路をすいすいと歩いている。どうしてあんなに早く歩けるのだ

ろうかと思った。

そういえば三年前の六月に、こんな事があった。

私がある団体の懇親会に出席した時の事である。メンバーの中に盲導犬を連れた人がいた。

突然の懇親会だったので、店を予約していなかった。とりあえず目の前の中華料理屋に十数人の団体で入った。

盲導犬を連れたKさんが店員に尋ねている。

「盲導犬なんです、店の中に入れてもいいでしょうか？」

「かまいませんよ。でも店の隅の席に座ってください。」

全員が席に着いた時、店の責任者らしき人がやってきた。

「すみませんが犬は店内に連れ込ん

でもらっては困るんです。」

メンバーの誰かが「これは盲導犬ですよ。」と言っている。

実はこの年の九月から盲導犬や介助犬を食堂などに連れ込んでも良いことになったのだが、そのときはまだ六月だった。

「盲導犬はこちらでみますから」

しかしKさんは「私は盲導犬と離れるわけにはいきません。皆に迷惑をかけるから犬を連れて外に出ます。」と言った。

しばらくの押し問答の末、全員が席を立った。

少し歩いて別の店に入った。

こちらの店は、すんなりと受け入れてくれた。しばらくして盲導犬に異変が起きた。

炎天下の道路をあちらこちらに連

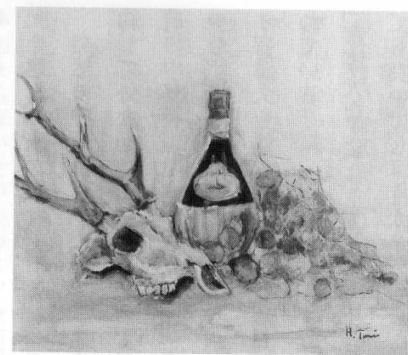
れまわされたあぐく室内の冷房による急激な温度変化に耐えきれず、バテてしまった。

「すみません、犬がカーペットを汚しました。弁償しますから金額を言ってください。」

「かまいませんよ。」と、お店の人は弁償を求めなかった。

その後もKさんは一生懸命盲導犬を介護していた。犬はグツタリしていたが、Kさんがトイレに立ち、足音が遠ざかると、無理やり起き上がり心配そうにしていた。やがてKさんの足音が近づくと、安心したのかまたグツタリと寝そべってしまった。

盲導犬と、盲導者の関係は、こんなにも奥が深かったのかと改めて感じた。



洋画 垂井裕人

随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



書道 山本みどり

神田の米作り

井口祥子

私達の村（角南）のお宮は村のど真ん中にどかあんとあり、村のどこからでもおがむことができる。というのは、角南神社のある丸山のまわりに田んぼが広がり人家は山際にあつて、どの家からも丸山が見えるようになっていいる。神社は、杉などの木々にかこまれ見えないが、丸山は美しく春の桜、夏の緑、秋の紅葉など四季を通じて良い眺めである。村の戸数は、四十七軒ほどで、岡津、延、影上、影東と四つの組に分かれ、それぞれ十軒余りの共同体でお宮のお世話も回り番でやっている。村中に太鼓が響き渡る時は何かの祭事が

ある時である。

今年は岡津の私達がお世話する年に当たっているのである。しかも、一枚だけであるが神田の米作りをやらなくてはならないのである。田植えから収穫まで大変なことは誰も知っている事で、誰も「引受けた。全部してあげるよ。」と言う者はいない。そこで、お宮の総代をして下さっている方を中心にみんなで相談し、田の荒起し、苗の調達、代かき、田植え、畦草刈り、収穫等々どのようにしていくか考えた結果、みんなで声をかけ合い力を出し合つて米作りをすることになった。

五月に入るとあたりは田植えで賑わい、青田がだんだんと広がっていった。

神田も田植えの準備に入らなくてはならない矢先、総代をして下さっている頼りの人が事故に遭われ、入院ということになってしまった。当人はどんなに心を痛められたことであらう。そして予約してあつた苗も農協から届き、五月十九日、田植え当日は朝早くからみんな張り切つて神田に集まつた。機械で苗を植える者、苗をさし出す者、田の凸凹をなおす者、機械が植えられない所を手で植える者、みんなの共同作業で二時間ほどで植えてしまうことができた。

「やったあ。」みんなの心に成就感が満たされた。田植え終了後、土間に

「ござを敷き、みんなでおつまみとビールで無事田植えを成し遂げたことを祝った。おしゃべりがはずみ、

「水は自分の田んぼと近いから毎日見るよ。」とか、「畦草刈りはいつでもやつてあげるから声かけをして下さいよ。」とか、みんな積極的な後の稲の世話についても話がどんどん出て来た。この調子だときつと稲も順調にすくすく育っていくことだろう。

最近ではみんなで協力してする共同作業が少なくなつてきていく中で、神田の米作りを通じ一人ではできないことも二人、三人と力を合わせれば能率も上がり楽しくできることを味わうことができた一日であつた。

かわいらしい野鳥、

じょうびたき

中田澄子

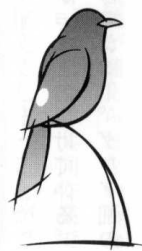
夏、華やかに咲き競っていたダリア。今ではもう一、二回霜にも遭い、茎や葉はシャリシャリに枯れ果てた。その盛りの時、重そうにたくさんの花や葉をもたせ掛けていた支柱に、今はまつわり着く様にからまつています。今日はこのダリアの整理をし、来年の花の為の準備をしようとして、畑に入つて行くと、チョツチョツと野鳥が飛びたつた。あつ、今年も来たのだね！毎年秋の今頃に姿を見せる。「もんつき」と、ご近所さんが教えてくれた。「じょうびたき」で季節鳥であるらしく、秋の今頃になるとどこからかやつて来る。私は

この鳥にジョーと名付けている。じょうびたきのジョー。ダリア畑の作業中、近くに迄飛んで来て、チョツチョツと鳴くので、私もチョツチョツと返事してやる。かわいい目をクリクリさせながら、枯れたダリアの絡まつた支柱に止まつて、クルリツと背中をこちらへ向きを変え、しつぽをビョコビョコ振つて鳴き返してくる愛嬌のある鳥です。先日、奥の部屋の方からコツン、コツンと何かが当たる音がします。音のする部屋へ行つて見るとジョーの姿がサツと窓の外を掠めるのです。部屋の物影に隠れて少し待っていると、屋外

の我家への引込電線に、ジョーが飛び移って来ました。そしてその電線から部屋の窓ガラスめがけて、バンジージャンプよろしく、ダイビングをしているのです。羽を広げそのオ―カー色のステキな腹毛を震わせながら垂直の窓ガラスに足を掛け、羽をバタつかせながら二度も三度もがくのです。つばきをビュッピュッと飛び散らし、キャッキャツとはしやぎ声迄あげている。部屋の中で見ている私には、飛行場で離陸直後の飛行機を空を仰いで見学している時の様な「貴女のすべて見てしまったわよ」と、なんだか、気恥ずかしいという気分です。そしてジョーは垂直のガラス面から滑り落ちる寸前、窓の上の雨といに飛び移り小休憩をします。そして体勢を整えて電線に

飛び移り、はずみをつけて窓ガラスをクライミングし、バタバタあがいて、落ちる寸前、雨といに飛び移り小休憩。この三角形の動作を何度も何度も繰り返し遊んでいるのです。又、別の日、我家はこの窓の下に間伐した檜を野積しているのですが、ジョーはこの積み上げられた丸太を台にして、彼の窓ガラス面迄羽を広げて静かに浮遊して上がって来るのです。家の中で見ている私には、芝居の役者がセリで登って来るがごとくに見えるのです。そしてジョーは静かに自分の身をガラスに小さくコツン、コツンと何度もぶつけて遊ぶのです。そして丸太に着地して休憩をし、丸太の台から浮遊して、窓ガラスにコツコツ…という事を繰り返しやるのです。我家の駐車中の車

のバックガラスはジョーのつばきとフンで曇っています。キャッキャツと声をあげガラス滑りを楽しむジョーを見掛けます。私は今年この野鳥に「ガラスのジョー」と名付けました。来年も又、来てくれるかしら。楽しみにしています。



介護と私

青山 元江

二病を持つ主人は、三年前、転倒が引き金となり殆んど寝たきり状態となりました。子供達は私の身を案じ入院を勧めましたが敢えて私は居宅介護の道を選び、現在に至っております。介護する側に立つて先ず感じた事は本当に筆舌には言い表せない悩み想いもあります。介護者の心得等の本も読みますが、現実はいさぐさい事では解決出来ない問題が山程あります。実は姉が数年前寝たきり状態になった時義兄は農作業、炊事、洗濯、掃除と一人でこなしそれはそれは献身的な介護でした。時折り尋ねる私には、手の出し様の無い介護

で、そんな義兄を見習わねばと思っていた矢先、私に振りがかり、今思えば大変な事であつたろうと、今更感謝しています。そんな義兄に少しでも近づける様に努力はするものの、至らぬ私には病人共々苛ら立ちもあつたりの日々です。それでも介護保険社会福祉の恩恵に浴し乍ら頑張っています。ストレスも人並に溜まりますが子供達は勿論近隣の友達に恵まれ温く支えられ助けられ、感謝の気持で一杯です。往診リハビリヘルパーさんの助けを借り乍ら、そんな私の癒しとして下手な句作り、花を植え野菜を作り、咲いた嬉しさ、

収穫の喜び又週一回生協の配達日早目に寄って団欒のとき、近くの店へも出掛けて久し振りに逢う人との会話等々それが私のストレス解消法です。廻りを見渡しても沢山の方が私よりも苛酷な介護をしておられます。事を思えば私はほんの序の口です。ふと我にかえり介護する者よりもそれ以上に病人の苦痛悩みの大きい事を手も足も自由に動かさず焦りや苛らだちもある事を沁々思い、添って五十七年間主人が在ればこそ心の支えとして過ごせる日々を幸せと思ひ頑張っております。

義兄よりの一言「悔いの無い世話を」と励ましてくれました。

臥す夫の寝息窺う熱帯夜

梵字と共に

山本 勢津子

梵字に興味を持ったのは、もう二十数年前のことでしょうか。父の古文書の中から見つけた梵字はんじつたん悉曇文字でした。何を意味しているのか解りませんでした。いつか僧侶様に聞いてみようと思いつくと氣にかけておりました。

やがて、父や夫を見送り、幼なじみも逝ってしまい、心寂しい日々を送っておりまして、ある日仏縁を頂き、梵字悉曇のお勉強をさせて頂くようになりました。

梵字は、一字一字が仏様の名前です。大変奥深いものを感じております。いつの日か、先立つた方々に下

手な曼荼羅を土産に持って行こうと、生前のお顔を思い浮かべながら練習をしております。ほけ老婆になっても、来る日も来る日も梵字般若

やまぼうし（四照花）

加藤 美雪

平成十七年四月八日（花祭り）花の便りもぼつぼつ聞く頃となりました。私事一瞬の出来事により、足の

大腿骨の股関節が折れまして即入院となりました。どんな事がありましても院長先生にお任せする事に決心致

心経を書いている自分の姿を思い、又そうあって欲しいと願っております。

解らなかったあの書も、病氣平癒を祈ったものと解りました。ご指導頂いております僧侶様、お仲間感謝の日々でございます。

しました。

十三日午後七時半より手術を始めました。

半身麻酔で本当にどうなる事かと案じました。

院長先生、看護師さん、神佛にお任せ致します外何も考えます事はあ

りませんでした。

痛みも思ったよりも痛みませんでした。翌日早朝院長先生がネクタイ姿で「どうですか」と尋ねて下さいました。

その日よりハビリへ毎日車椅子で連れて行ってもらい足の体操をしていただきました。此の骨折した足が何時の日に歩けるのだろうと思ひ思ひ毎日ハビリに通いました。

此の部屋は私の知らぬ間に新しく出来た部屋でガラス戸越しに庭が見えてパンジー等の春の花が優しく迎えてくれました。電気治療の係の方が車椅子で以前のリハビリの部屋へ連れて行って見せて下さいました。現在の処は裏側の田圃の処へ新しく建ったのだと教えて下さいました。看護師さん達の子供さんの託児所も

出来て一日一日と様子がよく分り出して来ました。四月二十二日に抜糸をしていただき、四月二十八日から足は歩行器で歩いてリハビリに行ける様になりました。電気治療をして下さる方が、庭の花水木があまり大きくはないが満開に咲いていると教えて下さいました。

又足の体操のリハビリを両足毎日寝てしていただきますので、ガラス越しによく外が見え病室に居ります私にとりましては何より嬉しい事です。パンジーがいつまでも色とりどりに咲き、又大木が真ん中にどっしりと植えてありますのが目につき「よくついたのやねえ」と云いますと、リハビリの先生は院長先生が花木が大変好きで此の庭が出来ましたとか、託児所の子供達が大勢ここで

おとなしく絵の如く指導者の人と遊んでいるのを見ますと、元氣を出して早く歩ける様にならねばと思ひました。

あの大木は「やまぼうし」とか云う木だと教えていただき聞いた様な名だと見上げる様に大きく柳の様にやわらかい枝ぶりと関心を持ちました。廊下の書棚に並べてあります図書も読んでもよいのですよとお聞きして一冊お借りしました。それは「美智子皇后さま」でした。その内読んでいる中に美智子皇后さまの御作歌になりました「やまぼうし」の御歌がありました。すぐに書き出しました。

四照花やまぼうしの一木覆ひて白き花咲き

満ちしとき母逝き給ふ

この年も母逝きし月めぐり来て

歴史紀行

大きなできごと

些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなって

伝えよう



洋画 妹尾美智子

四照花やまはかし咲く母まさぬ世に
の御歌でございました。

「やまぼうし」とは「四照花」と書いてありました。リハビリの先生に難しい字ですよと云ってお見せしました。その内葉も出て青緑になりました。どんな花が咲くのだろうと足の体操をしながら色々話をして下さいますが、私はまだ花も知りません。毎日から嫁が新聞を持って来てくれますので、或日やまぼうしの花が新見の山に咲いていたと珍しい様に書いてありました。白い四枚の花びらかと思われるのは苞で囲まれ真ん中の薄緑の様な雄蕊雌蕊と思われるのが花だそうです。大きい木で上から眺める事は出来ませんが、上から見れば真白で美しいらしいです。私はこんな木とリハビリの先生にお逢い

出来て早く歩ける様にならなければ
とリハビリに通所致して居ります。
まだまだ気長にしなければ両足の
先がむくんで脛関節は痛みます。年
も満八十四歳を迎えました。次に窓
辺より眺めました庭の俳句を駄作で
すがお知らせ致しまして感謝の日を
過して居ります。



生花 森本かよ甫

リハビリの窓辺二人風かおる
リハビリの窓より知りし山法師
リハビリの人優しく山法師
有難う山法師咲き杖つけて
公園を歩いてみたし梅雨上り

偶感 オウカミ伝兵衛

江見英雄

私の母方の曾祖母は日指の三澤氏の出である。曾祖母は祖父二歳の時、難産にて三十三歳で他界している。私は郷土史等読む事が好きで、約十年古文書を読む会に在籍して勉強させて貰っている。そう云う事で我が家のルーツにも関心を持つ。今から彼は二十年にもなるだろうか、美作渡里の知人を訪ね談偶々出雲の尼子氏に及んだ時、其の人の話さるる処に依れば、若年の頃、出雲地方旅行した時、何気なく書店へ入った処、珍しい尼子氏の事を書いた書を見付け買い求めて来て手元に在る。君、若し好かったら持ち帰って読み給え

と云つて下さったので、拝借コピーをもらせて貰った。私はそれ以前に毛利元就公の陰徳太平記（全八十八巻）を見た。その内、第十五巻に三澤氏の出雲地方に於ける活躍の事跡が載っていたので両方見て大いに勉強になった。此れ等の書に三澤氏の先祖は旭將軍木曾義仲二男義基とあった様に思うが私は信じて居ない。さて三澤氏は戦国時代出雲の木次線（かめだけ）亀岡駅の近くの所謂尼子八城の一つを預り、所領十三万石とか。戦国時代、曲折を経て津山森長継公に仕えて居たが、森氏は徳川幕府により改易させられた。三澤の当主はもう主

仕へはこりごりだと武を棄て津山を去り日指に來り自ら剃髪して医を以つて業と為す。子孫それなりに生活して曾祖母の父は西暦一八〇〇年生まれ、彼は二十二歳より六十一歳迄三十九年間、居村日指また岩辺、豊野、大内谷等の兼帯庄屋を命ぜらる。他界する迄よく村民を愛民撫育その死を惜むとの墓表があった。此の人の院号は、雲龍院仁應道意居士と云う。日指長城寺のあとを承けて居られる佛法寺で確かめ、戸籍に関しては除籍簿で確認した。尤も三澤氏は代々伝兵衛と通称しこの人は諱を岩藏と云い戸籍名は逸平となつてゐる。其の跡を継いだ息子の伝兵衛の時代日指は播州今の安富町安志藩小笠原氏一万石の支配地だった。小藩で生産力も低く上からの重圧もあつ

たろう。勢い領民に負担を強いる事もあり庄屋としての責務は果さなくてはならない。彼は毎朝率先して早く起き村中を廻つて働き精出せと督励して廻った。中には労働を好まぬ連中もいて何かと文句を云い悪口雑言する者も居る。そう云う連中はやかましいいうるさい庄屋だとけなす。

てしまった。陸軍伍長三澤武司君だ。妻女は土居からの妹尾氏だ。今西大寺の方にお住居だ。私はつらつら憶う。何処のうちでも末長く安泰は続

かぬものだと。何はともあれ日指には土居福城主の二代目の墓が毘沙門様の東庭にある。江見氏寛秀だ。三代目は鯨の十二代目を継いだ。

そうして注意を受けた連中はオウカミに喰いつかれた、伝兵衛はオウカミだとけなす者も居る。おまけに庄屋は度々火事を起す始末だ。父が死しその石塔は建てたが、金をしぶつたか手元不如意か親の石塔を建てたが石質軟弱で段々磨滅してしまい、私が終戦後墓参した頃は漸く読みとれる程になつていたので大切に書き取つて来た。後継者も必ずしも運がよくなく、主人は大東亜戦に戦死し

新聞を開いてもテレビのスイッチを入れても、国内はもとより世界中がテロや戦争で一般市民が犠牲になり、多くの命が奪われて、人の命が軽んじられてるように思います。仏教では、「人の命は、地球より重い。」と教えています。一度失えば二度ともどらない、という掟を幼児の頃より教え、善悪の判断のつく子供を育てる事の教育改革を行う事が必要ではないでしょうか。間違つ

た宗教の教え、北朝鮮の弾道ミサイルの事など、若い先短い私にも他人事ではなくなりました。話は変わりますが、昨年の三〇号でお話ししました安東鉄馬先生の墓が、京都の霊山にあるとのことで、一度墓参りしたいと思つておりまして、出雲街道土居宿を後世にのこす会（会長 御前稜治）の研修旅行で、昨年の十二月五日に行く機会がありました。

老いのたわ言

吉政実夫

京都の霊山観音の右手裏山の草の中にあって見つけにくいだろうと思いきんでいましたが、坂本龍馬、中岡慎太郎の墓の近くに、早々に見つかり、掃除もきれいにしてありました。墓は土居の四ツ塚の志士の墓と同じようなもので、身分の上下はなく、みな同じでした。榊や水や酒などをお供えて、ねんごろに読経をあげて、帰ろうとしたところ、安東鉄馬と安藤誠之助という墓が二つあることに気付きました。どちらも美作の国の出身とありました。又一つ爺さんの謎がふえました。

皆様、京都へ行かれた折には、新しい日本を夢見て、若干二十二歳で戦死された国学者でもあり武道家でもあった安東鉄馬先生のお墓参りを是非お願いしたいと思います。

毎年のことながら、浅学非才も願みず、たわ言を並べ、読み苦しいことと思います。心からお詫び申し上げます。



ふるさと発見

ふるさとの先人が

築きあげてきた諸々のものを

見つめなおそう

発見・発掘しよう

伝承しよう

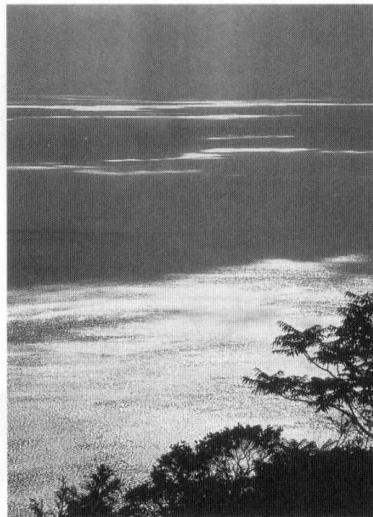


写真 青山時弘

宮原獅子舞との出会い

上原 和子（江見商業高校教諭）

平成十一年六月十一日。ちくさ高原でのキャンプの帰途、宮原獅子舞伝承館に立ち寄り、全校生徒と獅子舞を見学。いつもはにぎやかな生徒も真剣に見入っていた。私は、「能」でも鑑賞しているかのような不思議な感動を覚えた。その力強い舞に、脈々と受け継がれてきた日本人の心の温かさを感じ、時間を閲した文化に心を打たれていたのは私だけではなかったはずである。

数日後、当時の校長有義行先生から、校長室に呼び出され宮原獅子舞の説明を受ける。三百年の歴史のある獅子舞であること。戦後の混乱と過疎化で一時期衰退していたが、昭和五十五年（一九四〇年）に若者が中心となり保

存会が結成され、活動が続けられていること。しかし、かつての若者たちも齢を重ね、後継者が不足気味であるとのことであった。そこで若い江見商業高校の生徒が協力できないものか、是非取り組んで欲しいとおっしゃられたのである。

私に白羽の矢が立ったのは、フルートを少々嗜んでいたからのようだ。校長先生曰く「獅子舞には笛がつきものだ。フルートも西洋の笛だろう。」こうしたいきさつで、私が担当することになったのである。当初は不安ばかりであったが、その不安も生徒が一掃してくれた。

獅子舞の活動のことを生徒に告げると、お祭り大好き生徒・音楽大好

き生徒・地元のお祭りで御神輿や山車や獅子舞を見て育った生徒など、個性豊かな生徒が九名も集まった。それぞれ思春期の悩みは当然抱えているが、皆獅子舞の虜になった。

伝承館での夜の練習には、地元の方々が一所懸命指導に当たってくれた。昼休みまでも生徒達は練習した。

翌年には、熱心な活動が評価されて「獅子舞同好会」は部として認められた。その頃には、生徒達は獅子舞の魅力にどっぷりとつかってしまっていた。素朴でやんちゃな生徒も、伝承館での正座の挨拶の時ばかりは神妙であり、私の目には若干滑稽にすら映った。また、生徒達はピアスをしてみたり、大人から見ると、だらしない面をのぞかせることもあったが、地元の方々は「現代っ子だからなあ。」と温かく指導してくださ

った。ともかく、生徒達は学校では想像もできないほど熱心に真摯に獅子舞に取り組んだ。

二年目を迎えた時、新たな問題が発生した。代々、獅子舞は男子が演じて来たが、元氣な女子生徒が獅子頭を回したいと言いつ出したのだ。宮原の方々は、「今の時代だから。」と快く指導してくださった。しかし、女性の力には限界があった。手首の力が弱く獅子のあごをうまく開閉できないのである。「申し訳ないけどこの舞は無理だ。」と言われた生徒は、悔し涙を流した。

昨年、地元出身の方々をバレンタインホテルに招待したパーティが開催され、その席で、演技する機会があった。演技が始まると、皆さんの手が止まり、視線が正面のステージに注がれた。演目ごとに拍手喝采。アンコール。多くの「志」までいた

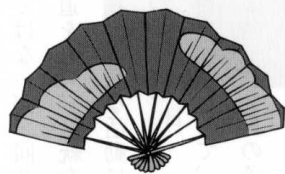
だくことになった。皆さんは、きつと昔の日々を思い出され、懐かしんでくださったのだと思う。久しぶりの故郷を楽しんでくださったはずである。喜んでくださった笑顔は、演者にとっても喜びである。

私は、『宮原獅子舞』に出会って、伝統芸能の奥の深さを改めて教えられた。昔の人々の生活に密着し、祈りであり願いが素朴な獅子の姿としぐさに込められている。教科書もなく、みんなで協力して創り上げて行く舞。年代を超えて伝承して行く楽しみもある。当然多くのコミュニケーションが生まれる。三百年も伝承され続けた所以だと思う。

江見商業高校も平成二十年度末には、閉校をむかえる。高校生と一緒に獅子舞の伝承のお手伝いができたことを幸せに思う。子供も生徒も大人も、地域の老若男女が協力して伝

承していけたら素晴らしいと思う。

私は、天叟神社の秋祭りの宵宮が大好きである。かがり火に映し出される金の御神輿様。太鼓の音。笛の音。そして六本足の獅子。そこには、私たちの忘れかけた、神々しくも庶民的な日本の原風景が演出されている気がする。『宮原獅子舞』をご指導いただき、伝統芸能の魅力を教えていただいたことに感謝し、今後地域の方々と協力し伝統芸能の継承に微力ではあるが関わりたいと思う。ご指導をよろしくお願いしたい。



裾野がひろがる春日歌舞伎

有友 一正

東部作州地域では、江戸時代から上方、播州歌舞伎の影響を受けて農村歌舞伎が普及し、さかんに演じられてきた。今でも多くの神社の境内に農村舞台が残っている。

美作市粟井中にある春日神社境内には、明治時代に地元有志が舞台を建て、毎年春・秋の祭りに奉納歌舞伎を演じてきたが、昭和四十年代のテレビの普及に伴って衰退期を迎え、客足が途絶えるようになった。そこで昭和五十二年、伝統文化を残していこうと粟井春日歌舞伎保存会を設立して毎年十月初旬に定期公演を行い、若い会員も増えて人気が復

活してきた。

境内にあった舞台が老朽化して危険な状態となったため、隣接した土地を保存会が借り上げ、平成五年に新しい芝居小屋形式の春日座が完成した。これは、当初保存会会員の手で建築しようと、敷地造成・屋根組み材料等の調達を休みごとに進めていたが、最終的には県補助を受けて作東町が建設し、保存会が管理運営委託を受ける形となった。従来の舞台よりもひと回り大きいもので、建築場所「市場」が城下町であったことから、町屋風の落ち着いた外観となっている。古い舞台を忠実に再現

したものではないが、回り舞台、大夫座、花道をもち、伝統を継承しながら、現在の活発な活動に合わせた建物となっている。

この舞台を拠点として、保存会員と演目によっては会員の子供たちが農村歌舞伎の練習・公演を行い、伝承活動に取り組んできた。平成十年からは地元の粟井小学校六年生全員が上演するのが恒例となっている。

セリフ回しや内容の把握が難しく、当初はとまどっていた子供たちも、柔軟な頭でセリフを覚えるのが速く、保存会員の熱心な指導により演技も上達して、本番には化粧し衣裳を着けると立派な役者に変身。家族や知人など観客が増え、立ち見も出て客席は超満員で以前に増して活気をおびてきた。

子供たちは、兄・姉・先輩の演技を見て六年生になったら自分が出演するという自覚ができてレベルがあり、会員の演技に勝るような、いわば「おとなを食う」小学生役者が誕生している。平成十六年には小学六年生の演目に加え、小学生時代に舞台に立った中学生が上演する演目があり、おおいに盛り上がった。

平成十七年十月八日、九日の春日歌舞伎定期公演のなかで、小学生は三番叟、寿曾我対面、白浪五人男を演じるようになっており、夏休み前から練習が始まっている。

このように、小学生たちが農村歌舞伎を演じることは、地域に伝承されてきた文化財を楽しみながら学習し、自ら伝承の一翼を担っている。また、どちらかというと内向的な傾

向のあった子供たちが舞台慣れし、スポーツ大会などの大舞台でもものおじせず活躍をしている。そして役者・観客ともに裾野が広がりをみせ、地域の活性化につながっている。



日本画 小坂田 初子

短文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力

螢飛夜
堂静

美泉書

書道 江見美子

詩

鬼ノ城讃歌

田中清一

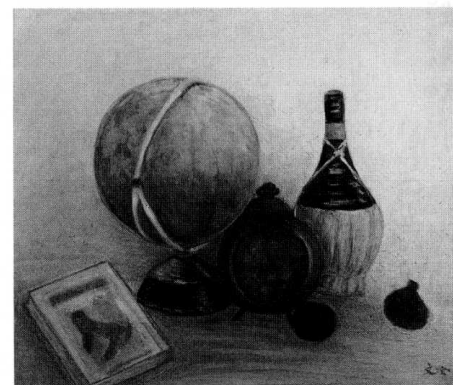
あけぼのの 吉備の大地に あらわれし
聖気に 装う いや高き峰
幾重なす 断崖 人を 寄せがたく
ああ 磐座ならん 鬼ノ城よ
悠久の ひかりか陰か まぼろしか
雲 遠々として 夢をこそ語れ

たゆまざる 三河は豊けき 州を生み
つきせぬ 恵みに 実りゆく国
銅打つ 鎗音 四方に こだまして
ああ 構え揺るがぬ 鬼ノ城よ
防人の たかなる声か 雄叫びか
風 颯々として 海をこそ渡れ

あかねさす 瀬戸の海波 彩寒く
ながす ぐれない 哭く血吸川
誰が鬼と 騙りを 今に 伝えきて
ああ 千古を秘めたる 鬼ノ城よ
遠き世の 命か 温羅か 鳳凰か
舞え 悠々として 吉備をこそ謳え

ああ 今も吉備津に 鳴る釜よ
説くは 現の世の 人の道

俳句



洋画 小林文女

阿波路にて

春名 波留夫

紫陽花や声唱和して大師堂
発心の身を引き締める青蛙
鈴の音の石段登る枇杷熟れて
梅雨空に古刹の鐘の流れたり
瀧聞こゆ同行二人の杖洗ふ

雨請い

江見英雄

水分の（水神）神間召せ民難儀
城山に祀る稲荷や太鼓打ち
志士の墓まごころこめて草を刈る
父の日やビールの箱もまた一つ
西瓜なる鳥の網も念入りに

火取虫

坂井はつ子

日替りに覚ゆる不調青葉冷
かくれ飲む冷房風邪の葉かな
しやがみこむ試歩の途中の蛇苺
下闇に一瞬光る尖り墓
本堂に生を終へたる火取虫

粘着ねずみ

黒薮 貴（遺稿）

合併す表札売りが汗とばし
寄り合ひて夢見てゐるかつばめの子
冷麦に茄子もみで好き昼餉かな
粘着のねずみに長き夜なりし
ヘルパーに元気を貰ふ梅雨上り

蘇る

宿野淑子

懸命に悲しみ抱き戦後六十
日本海松を切り裂く風の音
幼児の頬染めし春の雪
ローマ法皇の唯一無二の足跡象徴して
撮りし一枚光も句も蘇る

若葉風

井口祥子

初節句写真を見ては酒をくむ
旧跡を尋ねし子等に風薫る
まどろみを誘いてやさし若葉風
子つばめの口と体を乗り出して
五月晴歩き初めの孫一步

故郷昨今

山下照夫

啄木鳥は飽きもしないで木を叩き
こりす達何を急ぐや木から木へ
雨待てど一滴も無し蟬時雨
空梅雨や植えそびれたる棚田かな
空梅雨に慈雨少しあり一安堵

トラちゃん田ンぼ

春名静山

古代稲植ゑて球団マークの田
一匹の蚊を仰山に街の客
揚花火特等席の二階窓
初蟬か耳の蟬かと確かめる
悉く猪の餌となり甘藷畑

春

高元寛一

電線につばめの群が啼き睦み
鶯や谷のせせらぎ光りけり
古き家ばらの垣のみ残りけり
入社式淡き剃りあとシクラメン
情熱の入社の窓に風光り

折り折りに

杉本幸子(土居)

地を掠めつばめ飛び交う初夏の朝
詩吟の会終えて帰りの夏の月
水やりやまずキンチョール蚊を払い
独り居も馴れてのんびり菖蒲風呂
あぶら蟬暑さなほ増す峠路

田植

高橋やえ子

田に映る日の出ゆさぶり田植かな
雨やんでいよいよ天つく松の芯
旅の日を燕に留守をたのみおく
山桜川の向うの遠さかな
早々と蛇の挨拶新居かな

待ち侘びる

加藤美雪

新年は我七度目の酉年や
小春日や縁に布団をひろげ干す
花便り少し後れて待ち侘びる
骨折して若葉の頃と早なりし
母の日やレッドカーネーション嫁届け

星月夜

森本久子

幸せな夢見て目さめし合歡の花
夕日おち野佛淋しく星月夜
さはさとは優しく谷間の能登の風
稲穂咲き我が散歩道風匂ふ
ひぐらしの声が山野を引きのばす

葱坊主

青山元江

厨まで手に余りたる露のとう
明るさの残る夕餉のわらび飯
葱坊主素直に並び園児達
介護車で夫の微笑み花の下
母の日や子に従いて一日旅

道

坂部金治

郵便車影を消し行く花曇り
春時雨踏む足先に土黒く
凍結路力むハンドル尚硬く
驚や明け行く里に声冴えて
雲海や小島に変わる山の峰

芽木の山

山本登山

日矢太し丘ことごとく花芒
日々変わる里の彩り秋深し
鬼やらい不作の豆も驚づかみ
春寒や脈見る医師の笑み深し
様々な色湛えけり芽木の山

川柳



生花 中田敏甫

灯

春名静山

初恋はとおき日のこと爺と婆
灯を消すな絶すな過疎の老い住まい
羽ばたいてみても所詮は老いつばめ
石頭少し呆けて四月馬鹿
人形を抱いて寝るのは二度童

寿

山本千恵

寿の酒をもらいしクリスマス
寿の風よ吹け吹け来る年も
引ぎわは常に大事に寿で
吉運が占い表に出たのかな
たのしさを袋につめて友と逢う

大相撲

黒藪 貴 (遺稿)

名大関遺族円満とは成らず
禪あり正装もある土俵かな
落ちそうな大関許りごろごろと
功成りて親方となり鞭を持つ
岡山の力士黒星好きらしい

時事見聞

山下照夫

核兵器自分達だけ持ちたがり
拒否権でエゴ丸出しの五大国
中越でしまいにしたや大地震
作東の名前の残るインター出来
ひとつだけ良いニュースあり紀の宮

戦

高元寛一

禪とバナナを替えし日の戦地
戦で五つも六つも死にかけし
想い出の南の空の十字星
ヤシの実が命をすくった有難や
殉国の花と散る友安かれと

若い氣

山本登山

遅刻の理由聞かず周りの目が光かる
煙草もう止めたと見せた飴ひとつ
花薙こぼしつ酒を注ぎまわる
若い氣については来ない腰と脛
溢れそう口が迎えるコップ酒

長生き

江見英雄

生きて居るしるしだ少しものを書く
長生きも氣兼ねするよな世となりぬ
思い出は尽きず人生九十年
衣鉢えはつ継ぐ者見当らずあきらめる
分祀せば御霊は永遠とわに安からむ

独り

山本昌子

猫に愚痴聞かして独りの日がくれる
よくばらぬ幸せ抱いてひとり住む
返事ない仏壇に問うあれやこれ
淋しくて切れた受話器を持ち続け
待つ人も無いけど床に花を活け

平和

名部みどり

よくうたう雌鳥がいて村平和
左足を出して休んでる昔の夢
夏休み新入社員が先にとり
ずた袋が歩行器と歩くお寺かな
胸算用違つて熊も引返し

足

名部和子

足痛く動き鈍いが口達者
右足を庇い痛めた左足
怪我をした理由は薬の落ちて
痛いふりしていた足を間違えた
薬より歩け歩けと医者云う

老いて尚

山下光子

青春期やせたい夢も今アバラ
絶えず来るカタログに無い吾がサイズ
サイズ合う娘のお下がり狭め合う
瘦身もよう歩く足撫でてやり
一病が望みの趣味の邪魔をする

余生

香山夕咲

何時までも氣合い忘れぬ老軍人
播いた種もう出る筈じゃと掘つて見る
血圧計外して保健婦思案顔
毒舌も角が取れてか好々爺
忘れられぬ身ちり桂灸やいとのあの熱さ

古時計

太田智子

若妻の頃もあつたよ走馬燈
休みたい時もあるうに古時計
すぎる胸欲しいと思う貝一つ
村の衆今年の田植無事終る
農の血が割に合わない汗流す

大物

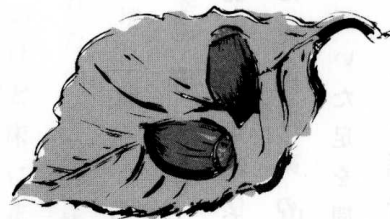
衣笠隼巳

大物も威光失せれば孤立する
性格の不一致でしたと理由づけ
あの時の殺し文句も若さゆえ
惜しいからそれが溜って皮下脂肪
無農薬国内産と言えば売れ

生きる

原 洋一

青白く愛の絆の輪に生きる
昔話聞いたまあるい母の膝^{ひざ}
肩書きを捨てて花の名ひとつ知る
同じ月夫婦は別なこと思う
ボンと割るひとりぼっちの生たまご



短歌

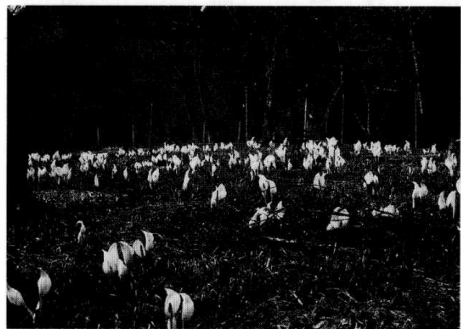


写真 水島正崇

母は在さぬ

三木泰葉

卒寿まで生き来し母の爪固くいまは爪つむことも
許さぬ

母の懇願きき入れざるまま帰り来て両足のばせば
先より冷ゆる

泣きじゃくる暇もあたへず美しき死に顔などして
棺に納まる

離りゆく母のことばは聞かざりき祝祭のごとわれ
は葬らむ

べうべうと母のみ骨の運ばれて嗚呼と叫びたき声
をのみこむ

鹿久居島

江見英雄

春深し鹿久居の島に史跡訪う親族六人が波路を蹴
つて

奥都城は汀に近くありにけり部下の武士とも石碑
ならべ

夏来れば全滅したる要塞の虎頭の戦友を思ひ出し
居り

この夏も芍薬の花乱れ咲き果てにし戦友を慰め居
りぬ

二歳なる曾孫法事に帰り来ておどけし仕種皆々な
ごむ

古代の品種

春名静山

後継者なく二軒目の廃業か町より消ゆる文房具店

球団のマークの形に植えられし黒米赤米古代の品
種

早朝の稲の害虫防除するラジコンヘリの操作見て
おり

田水引く溝堰き止めて早苗饗の神に供うる苗洗い
おり

老妻と現世の暮らし何時までか末案じつつ初を播
きおり

わが浮目

坂井はつ子

看護師らが作州言葉を遣ひつつわが激痛をやはら
げくれぬ

蒜山の裾野あたりの村の名の看護師がある豪族な
らむ

駐車場をうづむる車千台なり病院従事の人らのも
のぞ

医師が子にご高齢なのでと告げたらし後は何ごと
も耳に入らず

転送につぐ転送のわが浮目この病院の全景を知ら
ず

和氣藹々

黒藪 貴（遺稿）

吉野村作東町となり美作市山の奥なる苦屋恥ずか
し

百歳で元気な人のテレビ見る吾れは卒寿で介護三
級

死語となる和氣藹々の語を惜しむ世の果までも人
は争う

蕎麦を挽く母を手伝いそば掻きの夕餉の味に箸の
弾みし

山ぐみの有り処皆知り下校の途一人で山を走りて
育つ

折りにふれ

杉本幸子（土居）

爛漫と桜は咲けど約束をせし友は来ず永遠に旅立つ

眠らねば眠らなければと焦るうち外は白みて短夜明けぬ

雷鳴に夢破られて身を起こし布団を隅に寄せて寝てみる

夕映の川面にキラリ跳びはねる白き小魚競うが如く

窓の外カラカラ笑い賑やかな声は次第に遠ざかりけり

津山城にて

加藤芳英

濠や門郭や櫓の跡めぐり教はる櫓に自づと血さわぐ

狩のごとおびき寄せては獲物打つあらあらしき城かありし津山城

鶴山の堅固なる城は戦なく徳川瓦解と共にこぼたる

城跡の石垣みあげ石段を登りておもふ運上せし領民

廃城の跡に桜を私財もて植ゑし人の碑葉桜の下に

難問山積

山下照夫

拉致をする国にモラルを求めても期待すれども落胆多し

アメリカに肩入れをせる多国籍軍そのつけ重く血の犠牲とは

ユニセフの浄財までも喰い物に官僚モラル地に堕ちたるか

解散という名の刃に焼き廻り造反議員始末も出来ず

中越の暗きニュースのその中で強く生き抜く男児素晴らし

峡の邑

江見眞智子

人の住むほとりを好むか姫蚩青田越えきて軒場に寄るも

森林浴と思へば何のことはなし樹下に今し雑草引くを

減反に獣害かさむ里なるも祭り囃子は谷を渡り来

補助金の目安なきまま休耕田に黒豆植ゑゆくきのふも今日も

ひとり逝きまた一人去る峡の邑肅しゆくと寄する高齢化の波

時うつろい

山下光子

雪達磨

山下三代子

百人一首山家育ちの若き等は事ある休み集い興じし

朝窓を開くれば垣の紅椿一輪おはよう吾に笑みけり

クリーン作戦炎天の下汗だくに冷茶配られ木陰に一息

杉林に後光の如く銀杏映え己が在^{あり}処^めを彩^め粧^{かし}誇^{かし}示^{かし}せり

霜月の未だ暮れやらぬ東空に上弦の月雲間に浮かぶ

初雪にて孫の作りくれし雪達磨二つ並びて新春祝ふも

七草の芹摘みに行けば休耕田は春告げてをり水の中にも

福寿草蠟梅の黄に魅せられて「福力」にて買ふ庭に植ゑむと

健康を守る知識の多い今日童謡歌ひつつウオーキングする

早魃にて雨待ちゐしが朝の雨生氣溢れて緑鮮やか

歌舞伎

高元寛一

がんばりなさんな

加百由起子

トタン屋根夕日に映えて色温し我が棲む家ぞ寛ぎ眠らむな

鎌を手に山の小道を行きにつつ久久に聞く雉子のはばたき

古井戸は古を語りて夢多し今も残れる水苔むすか

万葉の昔を偲ぶ能登香山四季折々に景色を変ふる

健やかな古典芸能春日座の子供歌舞伎の輪は広まれり

三反の補植をなして百枚の苗箱あらひひと日が終る

代掻き終へて水の張らるる二反田を風の走れば煌くさざ波

側溝に引かるる水の勢ひて峡のわが村活きづく五月

体調をくづせしわれは我に言ふ「頑張りなさんな」「怒りなさんな」

無農薬を目ざすわたしの野菜ばた黄蝶白蝶あまた飛び交ふ

無駄な抵抗

小林増代

今更に何に頑張る老ぼれが何をしたとて無駄な抵抗

さり乍ら生くる限りは何によらず一生懸命頑張
りて見る

病もち足腰痛めデイケアに世話かけながら頑張
てます

願つても二度とこれぬ現世に居られることを感
謝しながら

今更に無駄な事とは知り乍ら短歌やパズルに挑戦
してみる

渡田に生きて

有元理嘉子

疎開して青春過せし旧友は「渡田が好き」と土道
歩む

雨乞ひに千段焚きせし龍王山に黒き雲湧き雷鳴ひ
びく

かぶら畑を涼風吹き来る昼休み木陰のベッドに眠
る我かな

和ちゃんの植ゑしいちはつ列なして五月の道辺を
明るく染めをり

挿木しては道辺に植ゑ来て十五年仲間と憩ふ道辺
でありたしと

台風災害

宿野和穂

五十年大事に育てし檜山根から倒され悲しみも湧
かず

大木と成りても脆きは人工林倒されし檜に立ちつ
くすのみ

鉾山の飯場なりしか白磁らしき皿のかけらあり倒
木の根に

台風の去りたる後の空淡く立待月は中天にあり

「木を立てて見るわが親のありがたさ」林業学も
崩れたりけり

生きて在れば

新田千晶

さはさとは流るる水音暗闇に蛍がふはり舞ふ杉坂
川

大空に悠悠と浮きぬし二羽の鳶輪を描きつつ左右
上下に

梅雨晴れに「トラちゃん田んぼ」の田植ゑ終へ
「虎とももっち」水田に成りたり

はじめての田植ゑならむや幼児は顔も服をも泥ま
みれなり

虐待にいちめ問題胸を突く事例ききつつ何できる
我やと

峽に生きて

新免三代

藪入りと言はれし今日を暮るるまで隣三軒話に睦む

裸木に大粒雫鈴なりに銀色放ちて万華の宇宙か

ぽあんと金色に浮きたる満月を微塵に刻む桜木の梢

いつしかに山並み消えて村も消え霧海の底に一人耕す

全緑の木木の生む精吹かれ来て私の臓腑に吞まれゆくなり

孫

原田順子

近しき娘が緊急入院したりけりその子思へば涙止まざり

地髪結び舞妓の様な姉いもとぢいちゃん見舞ひぬ千年飴さげ

咲きさかる月下美人を友呉れて一夜の夢と絵に残しけり

不断より活発なりし孫娘巫女に選ばれ物静かに舞ふ

屋上よりヘリコプターが飛び立ちて今日も急患空を運ばる

揺らぐ灯火

横山美恵子

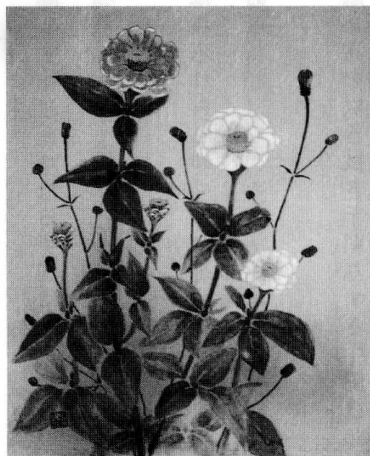
来客に「はい」の返事は良けれどもすぐには立てぬ暫くお待ちを

病院の待合室で会ひし友に元気と言ひしがここは病院

痛ければ「するな」とわれに言ふ子供草ばうばうの畑を知らずや

窓叩く雨庭木を打ちて唸る風暗闇の中に揺らぐ灯火

田も山も畑も家も押し並べて災の年を雪は浄めぬ



日本画 小林理智子

懷古

横山 すみ子

諸づるを挿して根元に水をそそげば思ひ出したり
父がしにしを

祖母の髪母は梳きぬきびんつけをぬりて束ねて母
穩やかに

祖母にもらひし大き二錢玉にぎりしめあめ玉買ひ
にき六歳の頃

朝鏡のぞけば母の生前に会ふ思ひあり歳重ねしよ

青桐の幹に凭れて故郷へ流るる雲を見つめし日あ
りき

生かされ生きて

横山 昌子

みじか夜を眠れぬままに朝を待つ畑の野菜に水や
りたくて

雨降らず乾ききつたる芋畑に土竜脅しのからから
と鳴る

失はれ忘れられゆくわが暮し無為にすごしし日日
にあらねど

高岸を汗を拭き拭き手刈りする牛飼ひしたる日日
懐ひつつ

八十路まで生かされ生きて働きて雲を楽しむ花を
楽しむ

狂ふ

井上 智

生計のもとでとなりし畑なるに踏み入るすきなく
草の茂れる

一穴に二粒まかむとつまむ豆しばしば狂ひて重な
りおつる

ばつばつと水うつすがに狂ふがに草木みだして雨
は降り打つ

旅立ちには生き来し姿勢にふさはしく遺稿なる歌く
りかへし読む

米作りやめたることは告げ難くただ花たむくる父
の命日

船の旅

名部 みどり

赤土に育ちし大根を洗ひ終へ新しきタオルで拭ひ
て並べぬ

幼より育てし庭の老杉が屋根にもたれてざわざわ
となく

こんな遠くよく来たものと眼をひらく孫の合宿
教習所は若者ばかり

南まはりの三か月の旅より帰りしと友の便りあり
味噌練りつつ読む

海は好きとふとはほゑみて遠くを見る友と居てよ
し瀬戸の船旅

里の夕暮

安西 苑

出揃ひし稲穂を渡りて七月の暑き風吹く里の夕暮

川の面を包むが如く枝を張る合歓の花咲きて小豆
蒔くを知る

田の畔に腰をおろして見上ぐれば果なき空を白き
雲流る

まだ暑き日はあるなれども夕風が青きすすきの秀
を渡り行く

地に我が影空に愁ひの雲流れ静かに静かに暮るる
わが里

天変地異

名部 方子

乙酉天変地異の治まるを願ひて吾も注連飾り買ふ

「今年も又頑張りませう」と声掛けて雪解け待て
ずウォーキングする友

叔母見舞へば目は開かねどうなづきて涙一筋枕に
滲む

伊予に来て初めて見たるあい染よ四国三郎も青く
流れて

薄氷張りし川面に青さぎの何想ひあるや首竦め立
つ

心に楔

藤本 伸子

花は散りつつ友の遺影の前に座す残されし妻よ心
如何にや

在りし日の君の姿に重ねつつ抱きし孫の温かきか
な

唄に酔ひ酒にも酔ひし友の顔仕事半ばの惜しまる
る死よ

逢ひてより六十八年元氣にて生き来し君が死出の
旅とは

生きてゐてと願ひし君よ死別とは心に楔を打たる
ごとし

孫

名部 和子

久びさに逢ひしわが孫自己主張ふえておどろく世
の流れかな

お受験の意味さへ知らぬ幼児の笑顔がうかぶ眼つ
むれば

マーケットの入り口の壁にゆれてゐる小さく赤い
靴の片方

幼児の逆立ちすればにこにこと足の裏にも顔ある
ごとし

わが孫は鋏で紙を切りながら鋏を開けつつ口もあ
けつつ

年輪

藤川 亜也

青葉より育てし枯葉肥として年輪さざみ行く木木の
いとなみ

二十五年変らぬ夫は微笑むも古稀を迎へし我の歳
月

木枯しに弄ばれて還りゆく落葉と共に君は逝きに
し

世を渡る拙き風にあざむかれ飛行機雲が空を分け
ゆく

峡の地に春夏秋冬移ろふを眺むる仕合せ師走の陽
のなか

紫陽花

横林 富砂子

孫達に成人の祝ひ出来うるに我は満ちをり少子化
の世に

道行けば人影見えず静かにも大地は眠る如月の夜
を

ハルウララ負けても人気の牝馬なりひたむきに走
る努力を買はれ

紫陽花の薄くれなるの花まりよしづかに佇み話し
かけ見る

珍しくヘリコプターの飛び行くをしばし眺めぬイ
ラクを想ひて

わが身のめぐり

清田 三智子

杲杲と射しくる真夏の日の照りに洗濯物もまばゆ
かりけり

台風に杉の大波立つ如しガラス玉の如き雨横なぐ
りに降り

雑木木の紅葉は朝の日をうけてきらきららりと
舞ひ落つるなり

雪掃きて腰をのばせば木の枝にたまりし雪は映え
ゐて青空

人並には出来ない腑甲斐なさ詫びるれば元気でゐ
てくれるだけでよいと言ふ娘

折折に

原 幸子

春雨にうすれて見ゆる能登香山温もり有るがにふ
んはり浮んで

裏庭の牡丹の蕾ふくらむを日ごと廻りて咲くを楽
しむ

真夏日に鬼に見えたる螳螂よ柿の木に鳴く蟬を捕
へて

箱庭に楽しみに植ゑし露のたう薄き緑の花ほころ
びぬ

高野山の苔むす墓をさまざまに語らむ人も声も古
びて

四季折々に

鳥形節子

新緑にせばまり見ゆるわが庭の心やすまるこの羅漢槿

とりどりの春の花咲くわが庭よ咲き出づる花に日毎の笑顔

山道に香り漂ふ目をやれば小さき野花ささやきくるる

吹く風がかすかに春をはこび来て節分草は花を咲かすも

朝まだき鶯の声透きとほり我を上げます心のささへか

幼孫

池田保子

入学の春待ち遠しきか幼孫日に幾度もランドセルを背に

春風を吞みて大空悠々と鯉泳ぎをり過疎の里にも

子燕の声賑にぎしき軒先をしばし眺めて朝餉のしたく

いそいそと車走らせわれは今古典の世界に誘はれゆく

干し柿を剥く手休めて聴きゐるはわが青春の「エデンの東」

寒くても

荒尾登志系

寒さにも耐へて花咲く寒つばき色あざやかに空をみあげて

寒くても木鎌片手に枝木こる薪で炊く風呂わが家の宝

寒さにも負けずに顔出す路の臺若草色のくりくり坊主

寒さにも耐へてがんばる老人よゲートボールは長生きのもと

帰り来し孫らは雪を喜んでつめたさ忘れてかまくら作り

母おもふ日々

津田次恵

職退きて時計はづせし気楽さに晴耕雨読はや三年目

県境を越ゆれば今年も軒下に薪積まれゐる農家つづくか

二人居の居間にも春か華やかに雛一对あり友の手仕事

一人には惜しいと思ふ緑濃き風を五体になれし道ゆく

在りし日の母が好みし粟倉の元湯に今日も訛あふるる

新しき命

内藤 慶子

苗代をいつも手伝ひしてくれし娘ことしの春は他家の人なり

蟬しぐれ夏の終はりをつぐる朝次の命を宿すかその身に

新しき命育てよ健やかに赤ちやんの出番稲穂と共に

畑を打つ師走の昼も暖かく岸のほとりにたんぽぽの咲く

初孫の入学式に子供よりハッスルしてゐる母親の服

母を偲びて

光井 房子

嫁の顔も忘れしまでに老いし母頬なでやれば歌のひとつ節

祭壇の遺影の前の薄紅の蓮の映ゆれば極楽の花

百二歳の天寿を生きて逝きし母安らかなる面は花
花の中

人の世に生まれ来たりて百二年母の生きざま偲ぶ
百か日

百歳の祝の席にて戦友を歌ひし母の声確かなりき

能登香の里

森本 久子

ひっそりと咲きゐる空屋の水仙が人なつかしく呼ぶがに揺れをり

やはらかき春の朝日の岸边には幾多の花の舞ひ散りをりぬ

新緑の影にひそめる風そよぎ木の間に日暮れの月のあざやかさ

からからと風におされて梅雨雲の去りて空には星が浮びぬ

まるまると月の昇りし能登香山優しき風に青葉がそよぐ

春から夏へ

福島 美智子

パソコンを閉ぢてやうやく大寒の闇をまとひて主婦に戻り来

空高く市議候補者の放ちゆく連呼の声が春の陣張る

大いなる夕日がずんずん沈みゆく芽ぐみ来るものに息吹を与へて

厨にて路の皮むく夕暮れは何故か気忙し箱苗青く

蝌蚪を取る児童の歓声上がりゐる棚田は夏の光に耀ふ

孫

船曳 彩

髪の色も指の形も子に似たる孫と連れ立ち高野道行く

般若湯麦般若など酌み交し高野の夜は清く更けゆく

涙声までそつくりなるにうろたへてしどもどろぞ詐欺と気付くまで

三十歳嫁にも行かず「ユーラシア」の最西端へ行きしわが孫

リスボンは坂多き街と便り来ぬたつた一年長き一年

成長

新井 和代

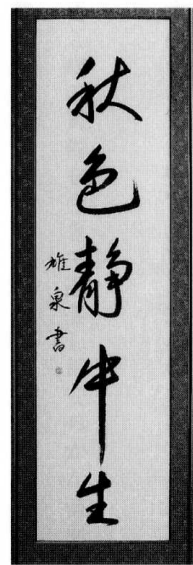
声高くはた声低く嬰兒は自らの声で遊びゐるがに

「なっちゃんが今声出して笑ったよ」その母告げくる笑った記念日

両の手でベッドの柵を握りしめ立てる幼児の臂がふらつく

バナナ指し大口あけ食べ物とわれに教ふる幼児の知恵

幼児は小さいごみを抓みゐる行き届かない掃除を知らせて



書道 岩本英雄

山里の春

角南 三津糸

山里に寒行の太鼓鳴り響く雑木の芽吹き揺するがごとく

初初しき新芽かがやくねこやなぎ何かはじまるすてきな予感

水温み池面に立つ輪あちこちに群なし動く鮎かや鯉かや

せせらぎに桜の花びら舞ひ散りて寄りつ離れつ花筏となりて

山里にむかしむかしの墓石あり風化せる文字に雪柳遊ぶ

つれづれに

角 利 津

まるき月夜毎に細くなりゆくも又満月となる約束
を持つ

十円を得て百円を失ふといふ目には見えない計算
を知る

そを買ひし店は倒産せしと言ふ山くらげ一切れこ
りこりと嘯む

餌を撒けば鯉は鯉ほど目高らは目高ほどなる音立
てて寄る

ぼんぼりの明りを一つ残し来ぬ五人囃子の真夜の
宴に

時 間

日 下 智加枝

母の胎の音に似ゐるか川底の石を透かして水の流
れて

鳥の羽根のちらばりてありしひとひらが風に掬は
れ鼻先にくる

うすあかりの空を残して夕闇が今日も山から降り
て来るらし

父の植ゑし梅に花咲き死後といふ時間ばかりがふ
えてゆくなり

向う山にはの白く桜の花咲きてこの頃山のやはら
かに見ゆ

夕日の記憶

入 矢 敏 江

その孫を守りて父は海に死にき享年五十二歳の真
夏

救急病棟に父は眠れるごとくありて人工呼吸器の
みが動きぬき

決断を迫られし部屋の海に向く窓溶かすほどの夕
日の記憶

父の死を決定せしは我なりと今でも思ふ死ぬまで
思ふ

想ひといふは小さなことで揺れ動く精霊流しのあ
かりのやうに

春

浜 田 くに子

母の読む百人一首は恒例となりてにぎやか元日の
夜

得意札は「式子内親王」少しづつ大人になりて正
月に来る

燈明を事ある毎に灯しつつわが家の一年巡りゆく
なり

立春の朝に捧ぐる燈明が一番好きといつか思へ
り

乾きたる音たて竹林吹き抜ける風もやがては春連
れて来む

折にふれ

北村 和子

のぞきたる一ミリ程の白き芽に願ひをこめて今日
粃を播く

約束はいつも反故になる貴女桜の花のほろほろ散
りて

朝毎に五つ六つ咲く夏椿ただ一日を咲きては散る
のみ

訴ふる症状すらすらパソコンに打ち込む医師はペ
ンを持たざり

鬼蜘蛛と女郎蜘蛛とが場所を決め照る日風の日動
かずふた月

追憶

新免 初子

空襲警報に「灯が洩れてるぞ」との叫び声耳底に
ありて六十年すぐ

赤ん坊を抱きて見送るその母を眼に刻みしは昭和
十七年

寅年われは千人針を数縫ひて納めたりにき六十余
年前

乳を欲りしほるがに泣く吾子を置き姑につききて
麦畑打ちゐき

余命など知る無くただに飛びてをりとばねば打た
るる蠅にあらぬに

折々に

加藤 保子

緑濃き雑木林の遠景に霞のごとく合歓の花咲く

十五夜の月の光に淡淡と浮き立ちて見ゆ泰山木の
花

高畦の草刈り終へて汗拭ひ空の青さを一人じめに
する

山鳩が鳴けば幼日よみがへる日暮れの畑に母を待
つとき

種まけば芽の出て育つ平凡に心がをどる吾が老の
日日

思ひ出の防空壕

長澤 和枝

棟の実をきゆこきゆこ踏みて出征する叔父送りに
き神社の境内

出征せし叔父の残せし一人の子は六十八歳今し父
恋ふ

防空壕を「早く掘れ」とて巡査殿に父母しかられ
き昭和二十年

子供等が五人もゐるに防空壕を掘らずにをりし父
母責められき

防空壕に飯事あそびの妹と弟もゐてわれは九歳

朝の光

中川 富美枝

大草の中に小さき吾のゐて朝の光が懷に差す

雲ひとつなき峡の空仰ぎつつ草の上に坐す種まき
終へて

スパンコールの輝きなどにはかかはらず大地の温
もり抱きて生きる

撒きし餌に寄り来る鯉は波立てず水面のわが顔消
して寄り来る

台風の過ぎたる朝の静もりに虹の大橋わが村にか
かる

峡のめぐり

黒石 貞子

裏藪に目覚しの如く鳴く時鳥あと一眠りと思ひを
る身に

土用うなぎ男孫二人で焼いたので少しからめと差
し入れくれぬ

この朝の露に濡れゐて茄子の色紫しるく秋茄子の
色

わが好む紫紺の桔梗の花咲けり咲いた咲いたとま
づ仏前に

飛び来たる我が目の前の山鳥に一瞬を猫の目付と
なりぬ

夏の匂ひ

末宗 千歳

野薊の花にのせたる銀の玉優しき風に地に還りゆ
く

夕焼をひとり見るには美しすぎるシャツターチャ
ンスと夫に電話す

二人して半歩なれるを語りつつ夏の真昼をのぼる
坂道

茜さす空を仰ぎて戻りきぬ八十路の足のたどたど
しさに

幸せを一杯つめこみ口をしめしつかととぢるに不
満がのぞく

潤ふものは

黒石 登代

花の季に古葉をはらはら散らす檜新芽出すには過
去捨てよとか

山萌えて夫逝きしときめぐり来ぬ哀しき記憶も薄
れて十年

青青と伸び来る苗に水遣れば潤ふものは苗のみな
らず

畦焼きの野火の煙は地を這ひてゆるゆる木立にす
がるごと消ゆ

唯撫でる撫でて宥める脛坊主芋も植ゑたい豆も播
きたい

生きちよるだけでまる儲け

阿部 すみゑ

辞書に読む髭鬚髯のおもしろし夫の無精ひげには
どの字を選ばむ

やり直しきかぬと知れば晩年を薬と夫と我共存す

売り言葉買はぬと心に決めをりてまたも夫の怒り
を買ひぬ

ひたすらに夫と生き来し五十余年百姓なれば喝采
もなし

脈拍も整ひをりて恙なし「生きちよるだけでまる
儲け」なり

醍醐の桜

森本 かよ子

満開の染井吉野の下び行くこの幸せを心に刻まむ
後醍醐帝の御幸伝へて千年を美作山地に生き生く
る桜

いにしへより数多の人の出入りせし潮待ちの港よ
今日も穏しき

瀬戸内の瀬の浦なる浜に来て万葉の歌のむろの木
憶ふ

何時しらに皐月の名札の文字も消え此の空白はも
う返らない

田畑の虫

梅本 信恵

草の葉の雄雌小虫の争ひに力んでみやる我にもあ
らず

庭先の蟬の抜け穴数知れず蟻の住処に变りてをり
ぬ

散りし花の草葉の陰の一ひらに蜜をもとむる蝶々
飛びきぬ

立秋の稲穂の真上赤とんば飛び交ふ下には案山子
立ちをり

出揃ひし稲穂にむらがる虫たちも農薬かかりて逃
げ惑ひをり

危ふき信頼

徳野 富美子

嘘つかぬ牛の舌をば嘘を言ふ舌が味はふ雑談しな
がら

「信頼」と言ふ危ふさの上に胎動を知らぬ男が子
を育てゆく

楠木の耀ふ若葉の下枝より古葉落ちゆく木下の翳
へ

人の死に涙わかぬと言ふ友が兎が死んだと夜半に
哭きをり

それぞれの思ひは言はでにこやかに語りてをるも
春嵐が吹く

台風百態

谷 名 保 美

台風が横波のごとく瑠璃戸撃ち弱点見透されし獣のごとく居る

台風に焦点失ひわらわらとくねる篋座標危ふし

台風がおどろおどろと森ゆすり闇の居場所を失はせゆく

樟の葉を千切り過ぎゆく台風がわが裡に組む緑のモザイク

台風が北へ運びし雲なれば必ず南へ帰らねばならぬ

灰の水曜日

関 内 惇

すると天より降り来し蜘蛛ひとつ倫なき国見
て還りゆきたり

わがまは主体性かや移り気は感受性かや狂ひは
個性や

サイパン島アッツ島はた硫黄島少年われらに刻み
込まれし名

音もなき電光ニュース死者二万人二十七兆円損失
の予測

ま澄む水に差し入れにけるわが指のじんじんとし
て灰の水曜日

作東文化協会会則

(名称)

第一条 本会は作東文化協会と称する。

(目的)

第二条 本会は作東の文化生活の向上を期すると共に、
会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事務所)

第三条 本会の事務所は美作市教育委員会作東分室内に
おく。

(事業)

第四条 本会は第二条の目的を達成するために次の事業
を行う。

- 一 講演会・研修会・展覧会等の開催
- 二 文化誌などの発行
- 三 その他文化の推進に関する事業

(会員)

第五条 第二条の主旨に賛同し本会の事業を推進する者
を会員とする。

(組織)

第六条 本会に部及び支部をつくることができる。

(役員)

第七条 本会に次の役員をおく。

会長 一名、副会長 二名、理事、部長、
副部長、支部長、評議員 若干名、監事 二名
(役員の任務)

第八条 一 会長は会を代表し会務を統括する。

二 副会長は会長を補佐し会長に支障があった
場合には会務を代行する。

三 理事は会務をつかさどる。

四 部長は部を統括し副部長は部長を補佐する。

五 支部長は会務をつかさどり支部の振興を図
る。

六 評議員は運営について協議する。

七 監事は会計を管理する。

(役員の選出)

第九条 一 会長・副会長は理事会で選出し総会で承認
を受ける。

二 監事は総会において選出する。

三 理事は部長・副部長・支部長をもってあて
る。

四 部長・副部長は部で、支部長は支部におい
て選任する。

五 評議員は部長・支部長が推薦し理事会にお
いて承認を受ける。

平成16年度 作東町文化協会事業報告

【全 体 事 業】

年	月	日	事 業 名	内 容
16	3	28	総会	バレンタインプラザ
	4	20	第1回理事会	事業計画・「作東の文化」発刊・会員募集について
	5	10	専門部役員会	専門部事業計画・予算配分について
	5	10	第1回編集委員会	編集委員長選任・編集方針について 以降7回開催
	5	27	勝英2郡文化協会総会	勝田町役場/15年度事業・決算報告、16年度事業計画、予算について
	6	1	第2回理事会	研修旅行・文化誌原稿募集・文化展について
	7	26	第3回理事会	文化協会の今後について
	8	27	勝英2郡文化協会研修会	安東靖雄氏講演 バレンタインプラザ
	10	2	研修旅行	香川県丸亀市
	10	15	文化誌30号(記念誌)発刊	全会員に配付
	10	29	第4回理事会	文化展について
	10	30	文化展	海洋センター 31日まで
17	1	14	第5回理事会	春の書画写真展について
	3	4	第6回理事会	総会について
	3	19	春の書画写真展	環境改善センター 21日まで

【各専門部・支部活動】

年	月	日	部 名	内 容
16	4	4	茶華道部	さくら祭り 華展・茶席 バレンタインプラザ
	4	4	芸能部	舞の会
	4	25	棋道部	双山囲碁大会 粟井地区センター 以降8月22日 17年1月30日に開催
	4	10	園芸部	春の山野草・手作り鉢の講習会 きんちゃい館 /～5月
	5	18	土居支部	総会(評議員会)
	5	1	絵画部(洋画部)	春の作品展 バレンタインプラザ/5日
	5	16	江見支部	評議員会
	5	16	豊野支部	評議員会
	6	9	福山支部	役員会 以降2月に開催
	6	16	絵画部(日本画)	県北美術展出展 津山市
	7	10	園芸部	鉢作り・籠作り講習会 粟井研修センター
	7	31	陶芸部	陶芸教室 圓光窯 /～8月
	8	14	園芸部	水辺の植物展示会 きんちゃい館
	9	4	書道部	白雲書道展 バレンタインプラザ/9月5日まで
	9	26	茶華道部(茶道)	お月見茶会 バレンタインプラザ
	11	3	土居支部	研修視察(成羽方面)
	11	6	江見・豊野支部	研修旅行
	11	14	粟井支部	研修旅行(徳島阿波踊り会館、藍染め研修)
	12	11	園芸部	お正月用寄せ植え講習会 きんちゃい館
17	1	7	写真部	研修会
	2	23	写真部	撮影会
	3	5	吉野支部	研修旅行
	3	12	福山支部	研修視察
	3	12	園芸部	作東町の早春の花山野草展 物産館前広場
	3	21	芸能部	舞の会
通年事業			絵画部(日本画)	こぶし会/第2土曜日 午後1:00～ さつき会/第1・3木曜日 午前9:00～ 江見地区センター
			絵画部(洋画部)	絵画教室/環境改善センター 第1・3土曜日 午後1:00～5:00
			茶華道部(華道)	役場窓口・公民館への展示
			文芸部	川柳同好会 偶数月第1水曜日例会 午後2:00～
			歴史部	古文書を読む会 毎月第3金曜日 午後1:30～
			手芸部	中央公民館 毎週月曜日、毎月第2・4水曜日 9:00～12:00
			棋道部	教室 ショッピングセンターエミー/毎週土・日曜日 午後1:00～
				教室 粟井教育集会所/毎週月曜日、公民館/毎週土曜日 10:00～
			情報映像部	文化協会HP更新
				部会/第3木曜日 13:30～ パソコンサークル/毎週水曜日 19:00～ 粟井地区センター
			粟井支部	役員会 年5～6回
			各専門部	愛寿大学趣味の講座:書道 短歌 囲碁 手芸 絵手紙 プラザ側面へ展示:絵画、書道、写真、文芸、陶芸、絵手紙、墨絵、押絵、ちぎり絵

六 任期中途の補充役員は理事会において選任することができる。

(事務局担当者)

第十條 事務局担当者は会長が委嘱する。

(役員の任期)

第十一條 一 役員の任期は二年とする。但し再選は妨げない。

二 任期中途の補充役員の任期は前任者の残任期間とする。

(顧問・特別顧問及び参与)

第十二條 本会に顧問・特別顧問及び参与をおくことができる。顧問・特別顧問及び参与は総会の同意を得て会長が委嘱する。

(会議)

第十三條 一 総会は毎年一回開催する。但し必要に応じて会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。

二 評議員会をもって総会に代えることができる。

三 理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

(経費)

第十四條 本会の経費は会費・補助金・市よりの事業委託料・その他をもってあてる。

(会計年度)

第十五條 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもって終わる。

(会則の改正)

第十六條 この会則は総会の議決により改正することができる。

(附則)

一 会員は年額一口一千円の会費を納入するものとする。

二 部会は書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・陶芸・芸能・棋道・情報映像・手芸とする。

三 この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。

四 平成十年三月二十九日会則一部改正 平成十年四月一日より施行する。

五 平成十一年三月二十一日会則一部改正 平成十一年四月一日より施行する。

六 平成十四年三月二十四日会則一部改正 平成十四年四月一日より施行する。

七 平成十七年三月二十一日会則一部改正 平成十七年四月一日より施行する。

編集後記

○本誌の題字は、長年にわたって、本会特別顧問の里見 明氏の書を使わせていただってきた。

昨年、三十号記念誌の発刊を期に本誌の前編集委員長の山本 章氏にお願いし、新書体の題字が生まれた。両氏に改めて感謝の意を表したい。

○また、本年度から新たに「ふるさと発見」の項目を設け、民俗芸能である宮原獅子舞と春日歌舞伎について記述をお願いした。

この項目がふるさとの歴史と伝統を発掘し、さらに発展させる礎となることを期待して止まない。

○さて、我が協会も町村合併によって町の名が消え、作東文化協会と名称を変更した。

活動内容の変化はないとしても、本誌の発刊費用は、町の委託料に頼ってきたものが、年々減額を余儀なくされている。果たしていつまで継続できるかと不安の昨今である。

編集委員会

作 東 の 文 化

第 31 号

平成17年10月15日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会 作東分室内)
編集委員 谷口 重人 青山 時弘 安東 靖雄
梅澤 紀之 小坂田 貢 新田 祐之
原 洋一
発 行 所 作 東 文 化 協 会
岡山県美作市教育委員会 作東分室内
TEL (0868) 75-1111 〒709-4292
HPアドレス <http://bunka.booo.jp/>
印 刷 所 株式会社 廣 陽 本 社
岡山県津山市田町22